

工業經濟論

有斐閣雙書

工業經濟論

伊東 岱吉
小林 義雄 編
加藤 誠一



有斐閣双書

* 基本テキスト *

編者紹介

伊 東 岱 吉

1931年 慶応義塾大学経済学部卒業

現 在 千葉商科大学経済学部教授

小 林 義 雄

1930年 東京大学経済学部卒業

現 在 国学院大学経済学部教授

加 藤 誠 一

1943年 立教大学経済学部卒業

現 在 立教大学経済学部教授

有斐閣双書

工業経済論

¥ 1,400.

昭和43年2月25日 初版第1刷発行

昭和54年12月20日 初版第17刷発行

編 者

伊 東 岱 吉
小 林 義 雄
加 藤 誠 一

発 行 者

江 草 忠 允

東京都千代田区神田神保町 2~17

発 行 所 株式会社 有 斐 閣

電 話 東 京 (264) 1311 (大代表)

郵便番号 [101] 振替口座東京 6-370 番

本郷支店 [113] 文京区東京大学正門前

京都支店 [606] 左京区田中門前町 44

印刷 株式会社精興社・製本 稲村製本所

© 1968, 伊東岱吉・小林義雄・加藤誠一. Printed in Japan

落丁・乱丁本はお取替いたします。

1333-095907-8611

は し が き

本書は、工業経済論あるいは工業政策論の標準的なテキストとして編集されたものである。現代資本主義経済における技術革新、産業構造の高度化、これに伴う各方面にわたる経済構造の変化を理解するために工業経済論の重要性はいよいよ高まっているのに、従来適当なテキストは少なかった。戦前には、ドイツの流れを汲む工業政策論が一般的であったが、戦後は、より基礎的・客観的に工業発展の法則とそれをめぐる社会経済的諸問題を解明しようとする工業経済論ないし工業経済学が一般的となりつつある。さてそのスタンダードのものはとなると各人各立場、方法においてまちまちであるのみならず、その問題点は広汎であってひろく各方面の専門家の協力を必要とするものであり、しかも工業化の展開のスピードが速く、つねに最新の理論と実際の知識を必要とするものであったから、1人のよくまとめうるどころでもなかった。経済原論ないし一般経済理論は、かかる工業生産力発展の生産関係に及ぼす複雑な現実の事態を理解するには、あまりに抽象度が高く、あるいは一般的にすぎ、より具体的次元に下りて、総合的に現実をつかむための、しかも最新の理論が求められており、本書はこの要求に応じようとする試みでもある。

本書は以上のような意図のもとに、それぞれの問題に関する17名の代表的専攻学者を網羅して、何回にもわたる構成検討の上で編集されたものである。本書の構成は、工業経済学の性格と工業生産の特質にはじまり、現代資本主義に至る工業発展の歴史過程にそって、工業化の先進・後進資本主義および今日の低開発国の諸類型、工業生産発展の諸形態、資本と賃労働の生産関係における基本的問題、工業化・重化学工業化展開の理論、規模の経済の問題を扱った上で、独占の形成から、現代の独占資本主義工

業における産業金融，市場構造と価格，資本蓄積と景気循環，技術進歩，産業合理化などの問題を扱い，さらに，国家とその政策の問題，および，独占の中小企業，労働者階級に及ぼす影響の問題に及んでいる。さらに，資本主義と比較するために社会主義工業化の特質を論じ，最後に日本工業の発達を現段階にまで辿っている。このように工業経済論としてふれるべき問題は，特殊問題としての工業立地論を除けば，おおむね網羅していると思う。

本書の立場は，工業化の基礎理論ともいうべきものを最初に体系づけた人はマルクスであるから，マルクス経済学にその基礎理論を求めるものが多いが，そのみではなく，マルクスによるものといえども，今日の最新の現実に即応する理論的發展を試みており，いわゆる近代経済学の成果も織り込んである。現実の分析という試練を通した理論の新しい構成を追求するという態度は一貫しているつもりである。

本書の構成は理論的に順序づけられているのであるから，20 講はそのままの順序で講義されることが望ましい。1 年間の講義としてはやや内容が多すぎるかもしれぬが，適宜に利用されたい。

工業経済学は，まだ未完成の学問であり，本書は一応その標準テキストをめざしたものではあるが，いろいろ不備があるであろう。執筆者各人の立場によって不統一も免れていない。大方の批判をこう次第である。

最後に，本書の刊行に一方ならぬ尽力をいただいた有斐閣編集部の中村英一氏に心から敬意を表したい。

昭和 43 年 1 月

編 者

目 次

第1講 工業経済学とは何か	1
1 工業経済学の対象と方法および課題	1
a 工業経済学の対象	1
b 工業経済学の方法と課題	4
2 工業生産の特質	11
a 生産に関する若干の基本概念——労働過程，生産力 と生産関係	11
b 工業生産の特質	19
〈参考文献〉	26
第2講 資本主義的工業化の史的展開	27
1 封建的土地所有の解体	27
a 荘園の諸類型	27
b 非荘園的所領の歴史的意義	28
2 農村工業の成立	29
a 農村工業はどのようにして検出されるか	30
b 農村工業の経営形態	30
3 イギリス農村工業の展開	33
a 毛織物業	33
b 鉄工業	35
4 産業革命	37
a 産業革命史研究の動向	37

b 綿業.....	38
c 鉄工業.....	43
d 炭礦業.....	44
e 農業革命.....	45
5 後進資本主義	46
a フランス・アメリカ型	46
b プロシャ型.....	47
6 低開発国の工業化.....	48
a 農業.....	48
b 工業.....	49
〈参考文献〉	51
第3講 生産力の発展と工業生産の諸形態	52
1 ビュヒャーの経済発展段階説	52
a ビュヒャーによる5つの区分	52
b ゾンバルトの批判	54
c レーニンの批判	55
2 工業生産形態の史的発展	56
a 家内仕事 (Hauswerk)	56
b 手工業 (Handwerk)	56
c 小営業 (Kleingewerbe).....	57
d マニュファクチュア (Manufaktur)	59
e 大機械工業 (gross Industrie).....	60
〈参考文献〉	62
第4講 生産過程における資本と賃労働	64
1 工業における資本と賃労働	64

a	剰余価値の生産	64
b	労賃と賃金形態	65
2	工業労働力の形成と展開	66
a	相対的過剰人口	66
b	失業とその形態	67
c	貧困の問題	68
3	工業労働者の階級的な性格	70
a	労働組合の生成	70
b	闘争の内容と形態	71
4	む す び	72
	〈参考文献〉	73

第5講 生産力の発展と産業構成の変化..... 74

1	農工間の不均等発展.....	75
2	工業内部の産業構成の変化	80
a	重工業化.....	81
b	近代的化学工業の発展	83
3	あ と が き	84
	〈参考文献〉	86

第6講 規模の経済と産業の規模構成..... 88

1	大規模経済利益の意味と理由	88
a	規模の意味.....	88
b	大規模生産利益	89
c	大規模経営利益	91
2	大規模経済利益の実現条件と限界	93
a	生産的側面.....	93

b	資本的側面	94
c	市場的側面	95
d	管理的側面	96
3	大規模経済利益と適度規模	96
a	適度規模の意味	96
b	適度規模と中小企業	97
4	産業の規模別構成	99
a	非農林産業の規模別構成	99
b	工業の規模別構成	100
c	工業における規模別構成の国際比較	110
	〈参考文献〉	111

第7講 資本蓄積と独占の形成 112

1	資本の集積・集中と独占の形成	112
a	集積と集中	112
b	株式会社の役割	114
c	独占体の成立	116
2	独占的結合の諸形態	118
a	カルテル	118
b	トラスト	121
c	コンツェルン	123
	〈参考文献〉	124

第8講 独占と産業金融 125

1	株式会社の本質	125
a	株式会社の歴史性	125
b	株式資本の二重性	126

2 株式会社の機能	127
a 社会的資金の動員	127
b 資本の支配集中	128
3 株式会社金融の特徴	129
a 株式発行と銀行業務の変化	129
b 社債金融の特徴	131
4 現代資本主義と自己金融	133
a 自己金融化傾向と株式会社金融の変質	133
b 自己金融の原因と本質的意義	134
〈参考文献〉	136

第9講 独占価格・独占利潤

1 資本の集積・集中にもとづく独占的市場構造の形成	138
a 資本の集積・集中 ..	138
b 市場集中度の高度化	140
c 参入障壁の形成	140
2 独占価格の決定とその運動	142
a 少数大資本間の協調	142
b 価格決定行動における独占資本の基本的動機	144
c 参入阻止最高利潤率を実現する価格の設定	144
d 独占価格の運動	146
3 独占価格にもとづく独占利潤の収奪	149
〈参考文献〉	152

第10講 独占段階における資本蓄積と景気循環

1 独占段階における資本蓄積の特質	154
a 資本制生産における資本蓄積の長期的趨勢	154

b 独占と技術進歩	158
c 独占の蓄積法則と労働分配率	161
2 独占段階における資本過剰と資本輸出	165
a 資本輸出の必然性	165
b 第二次大戦後における資本輸出の特質	166
3 独占段階における資本蓄積と景気循環	169
a 独占体の投資決意と投資変動	169
b 政府の景気政策と循環の形態変化	171
〈参考文献〉	173
 第 11 講 独占段階における技術進歩	174
1 独占段階を貫く技術進歩の原理	174
a 資本主義的競争と技術進歩	174
b 独占段階における技術進歩を理解するための基準	175
2 技術進歩の歴史と現代の技術革命	177
a 20 世紀初頭の停滞と第一次大戦中の発展	177
b 1930 年代の発展	179
c 第二次大戦下の展開	180
d アメリカの技術独占と戦後の冷戦・熱戦	180
3 独占段階における技術進歩とその特徴	182
a 個人による発明と独占体による開発	182
b 独占による技術の歪みと頹廃	183
4 展 望	185
〈参考文献〉	186
 第 12 講 産業合理化	187
1 産業合理化と生産性向上	187

2 合理化の諸類型と基本的動因	188
3 合理化と労働	191
4 労働組合と合理化	195
〈参考文献〉	197

第13講 国家独占資本主義と工業199

1 国家独占資本主義の本質	199
a 国家独占資本主義の歴史的・階級の本質	199
b 国家独占資本主義の資本蓄積様式	200
c 国家独占資本主義の2類型	201
2 「改良」的国家独占資本主義の本質とその限界	202
a 1930年代とアメリカのニューディール	202
b 戦後西欧での国有化	204
c 「改良」的国家独占資本主義の本質と限界	206
3 軍事的・ファッショ的国家独占資本主義の本質	207
a 1930年代とドイツのナチス経済	207
b 戦後アメリカにおける経済軍事化と軍事的国家独占 資本主義の矛盾の成熟	209
〈参考文献〉	212

第14講 工業に関する国家の政策213

1 工業政策の役割	213
2 産業組織政策	214
a 反独占政策	216
b 競争制限政策	217
3 産業保護政策	219
4 国有化政策	221

(参考文献)	223
第15講 独占資本と中小工業	224
1 中小工業の概念とその経済構造	224
a 中小工業の概念	224
b 中小工業の経済構造 ..	226
c 中小企業問題の発生	228
2 中小工業の存立形態	229
a 下請制度の本質	229
b 中小企業系列化の進展	232
3 中小企業の存立条件	233
a 基本的な存立条件	233
b 低賃金の基本的原因	234
4 む す び	235
(参考文献)	236
第16講 独占資本と労働者階級	237
1 独占段階における資本＝賃労働関係の発展	237
2 独占段階における労働者支配の特徴	239
3 独占資本の労働者階級収奪の諸局面	243
4 独占段階における労働運動の特徴	246
a 労働組合組織の拡大	246
b 労働組合運動の2つの潮流	248
(参考文献)	252
第17講 社会主義工業化の特質	254
1 社会主義工業化の課題 ..	254

a	社会主義国営企業の成立	254
b	計画化のもとでの国家資金と労働力の配分	255
c	社会主義経済建設における国家資本主義の役割	257
2	社会主義国営企業のもとでの生産力の発展と生産の諸形態	258
a	ソ 連 邦	258
b	東 欧 諸 国	260
c	中華人民共和国	261
3	社会主義計画経済のもとにおける国家投資と企業蓄積	265
a	企業の資本効率率と収益率指標	265
b	計画価格決定メカニズム	266
c	社会主義工業化と賃金制度	267
	〈参考文献〉	268
第 18 講	日本における工業の発達(1)——戦前	269
1	はじめに	269
2	日本の工業発達の性格とその諸段階	270
3	産業資本の形成・展開期における日本の工業	271
a	近代工業の移植・創出と展開	271
b	近代工業の発展と在来工業	275
4	独占資本段階の工業構造	278
a	独占・金融資本の成立と工業構造変化	278
b	工業構造変化の賃労働基盤	283
5	戦時経済の進展と工業構造の再編成	285
a	準戦時期の再編成（重化学工業化）とその特質	285
b	経済統制・工業の軍需動員とその破綻	291
6	むすび——戦後日本工業への展望	295
	〈参考文献〉	296

第 19 講	日本における工業の発達(2)——第二次世界大戦後	297
1	終戦時のわが国の工業生産	297
2	工業の再建と独占態勢の整備	301
3	工業の積極的発展と新たな傾向	309
	〈参考文献〉	317
第 20 講	現代日本工業の到達点	319
1	工業の拡大と構造変化	319
2	外国との二三の比較	324
	〈参考文献〉	328
索 引		329

第1講 工業経済学とは何か

1 工業経済学の対象と方法および課題

a 工業経済学の対象

工業経済学は、工業という産業部門の経済現象、とくにその生産過程を土台とする経済諸関係を対象とする。工業は、資本主義が今日まで発展してきた原動力となった産業部門であるのみならず、低開発国がめざすところも農業国から近代的工業国への発展であり、資本主義と体制の異なる社会主義諸国が社会主義を建設するための土台となるものも、第一に工業生産の確立なのである。工業は、近代さらに現代の経済発展の主導力であり、その物質的生産の土台でもある。工業経済学は、現代経済社会の生産的骨組みたる工業の構造とその運動（発展）法則を研究するものである。

人間がその存在を維持し発展していくための土台は、人間が自然に働きかけることによってその生活に必要な生産物を生産することにある。人間は社会的動物であるから、各歴史時代の社会の生産組織を通じて自然に働きかける。人間は労働をすることによって自己一労働力を支出するが、この労働によって自己を物質的に再生産するための物財が自然から得られる。これは人間と自然との「質料変換」あるいは「物質代謝過程」と呼ばれるものであるが、この物質的生産過程は「労働過程」と呼ばれ（マルクス『資本論』第1部第3篇第5章第1節「労働過程」参照）、これが人間存在の再生産のために不可欠なことであることは、古今東西を問わず、永久不変の真理である。もちろんこの基本過程は、それぞれの時代の歴史的・社会形態—生産様式を通じて行なわれる。資本主義においては、資本の価値増殖過程として二重性・矛盾をもって現われる。

ところで、この生産の仕方には、①原始人の狩猟や漁撈にみられるような「採取」、②牧畜や農業にみられる動植物など生物の「育成」と、③自然のあるがままのものを採取・育成するだけでなく、これの形をかえ、質を変化させ、天然には存在しない形態や性質のものを生み出す「加工」とがある。この生産の3つの方法は、人類の生産の今日までの発展史の順序をも示すものでもある。

工業は加工生産を行なうものであって、加工生産が社会的分業の一部門として自立した場合、これを工業という。加工生産は、採取・育成に比して自然の制約をこうむることが少なく、人間の自然支配（人間が自然法則を利用しながら、その欲望充足の目的に向かって自然的質料を変化せしめること）のもっとも自由に発展しうる領域である。

人間を他の動物から区別する特徴は、人間は「道具を作る動物」(tool-making animal) (フランクリンの言葉) だという点にあるが、この人間労働の特質は、「手から口へ」といわれる他の動物と対比して、人間は「迂回生産」をするというふうに表現してもよい。つまり、自然の中に埋没して手足つまり身体の器官だけを用いることにより直接自然から採取して「手から口へ」消費する動物と違って（この場合には生産と消費は未分化である）、人間は、目的を定め、頭の中で求める生産物を描き、これを得るための手段・方法を考え、自然法則を理解してこれを利用し、その上で生産活動（生産労働）にかかる。この人間労働の特徴的なやり方を、むずかしく現代的に表現すれば、法則の研究理解を客観化し体系化したものが「科学」であり、これを利用して目的を達するために生産実践に適用することが「技術」である。そして、人間の身体器官の働きの延長として自然との間にさし入れる手段が労働手段であり、労働生産物としてのそれが道具である。人間の身体器官が主体となって用いられる道具が、人間の身体に代わる生産物＝自動的に働く機構にとりつけられたものが道具機＝作業